

和田洋一 名誉に聞く

教授

父と子と同志社

聞き手

河野仁昭

父・和田琳熊のこと

——お父さんの琳熊先生は、一九〇〇（明治三十三）年から一九四四（昭和十九）年まで四十四年間、同志社の先生をなさった方ですが、お生まれはどこですか。

和田 山口県の宇部村です（明治三年十二月一日生まれ）。そして山口中学校、山口高等学校に学びました。

——帝国大学は文科大学の？

和田 哲学科です。父が入学したころは、帝国大学というのは東京にしかなかった、だから東大といわずに帝大とおっていた。ところが在学中に京都にも帝大が出来たものだから、区別する必要上、東大、京大というようになりました。

——京大が出来るのは一八九七（明治三十）年ですね。

和田 そうそう。その翌年に卒業しました。

——お父さんは東大時代からクリスチャンだったんですか。

和田 山口中学校時代に山口教会で洗礼を受けていました。

——そういうこともあって、同志社へ？

和田 新島先生の直弟子というか、同志社

が出来たころの生徒に中島力造という人がいたでしょう。

——いました、中途退学ですが。

和田 その人が東大哲学科の教授になっていて、同志社から中島に、哲学科の若い卒業生を一人よこしてほしいと依頼した。「じゃあ和田がいい」ということで。

——東大にはやはり草創期の同志社に学んだ元良勇次郎がいますね、心理学者の。

和田 いました。父は元良と関係が深いはずなのに、同志社はなぜか中島に頼んだ。帝大の学生の懇親会で酒を強要されるのが父はいやでいやで、同志社はキリスト教の学校だからそういうことはないだろうというので招きに応じたのです。（笑）

——めずらしい理由ですね（笑）。それにしてもよく決心なさいましたね。同志社も、大正九年の大学令による大学の発足、海老名弾正総長時代から東大出身の方が専任教員で来られるようになりそうですけど、最初から心理学を担当なさったんでしょうか。明治十年代には下村孝太郎なども教えている。

和田 着任したのは三十歳前後ですが、着任早々から、中学や女学校の教頭をやらされ

ています。当時、名義上の校長は社長(総長)でしたが、実質的には教頭が現在の校長でした。帝国大学卒業という、値打があるように思われていたんでしょう。

——大正後期から文学部長、昭和十年前後のむずかしい時代に大学長事務取扱い、そして大学長を二度なさるのですから、そういう人物だっただろうと思われませんか……。それはそうと、着任当時からここ(左京区下鴨下川原町)にお住いだったんですか。

和田 いや、最初は室町通武者小路下ルで、私はそこで生まれました(明治三十六年九月二十二日出生)。まもなく蛤御門を少し下った烏丸通りのあたりに家を建てて、二十年間そこで住みました。

——宣教師の家が多いところですね。

和田 そうです。宣教師の家の前を通って、私は同志社中学へ通いました。

同志社中学に学んだころ

——同志社中学に入学されたのは何年ですか。普通学校時代?

和田 大正五年四月、中学と改称されたんです。父は一方的に同志社中学と決めていま

した。妹はみな同志社女学校でした。次の次の妹が府立第二高等女学校へ行きたいといつて頑張ったけれども、父は許さなかった。

——キリスト教主義の教育を受けさせたくてでしょうね。

和田 まあ、そういうことで。それと同志社中学教頭の波多野培根が、母のいところでたから親戚だし、安心してあずけられる。

——波多野先生は、一九一八(大正七)年に、例の同志社騒動というか原田助社長と意見が対立して、同志社を去りますね。

和田 日野真澄(大学神学部教頭)もそうです。日野は私の父の妹と結婚していましたから、私にとっては叔父です。

——お父さんは紛争にまきこまれるとか?

和田 父はそれほどはなかつたようです。

——日野先生のはちに復職されますね。

和田 私が大学予科の教員になったとき、予科長は日野の叔父(昭和五年就任)でした。めぐりあわせというか……。 (笑)

——同志社中学は厳格だったようですね。

和田 厳格でした。酒を飲んではいかん、たばこもいかん、遊廓もいかん。私が入学

するころまでは、日曜日は教会へ行くとか聖書を読むなどして静かに過さんならん。そのかわり土曜日は学校が休みで、山登りをするなり運動をするなりしてよろしいと。

——先生のころは土曜日に授業があつたんでしょう。

和田 私が入学する直前に変つた。その理由は、大阪朝日新聞社が全国中等学校野球大会をやるようになったからで、野球大会は土曜、日曜関係なしですから。日曜日は駄目というのは同志社だけ。当時の同志社中学の野球は京都で一、二を争うほど強かつた、その学校が日曜日は試合に出られないというのは具合がわるいというので、同志社の方針が変つたわけですよ。

——それは知りませんでした。全国中等学校野球はえらい副産物をもたらしたんですね。ところで、先生のころもテキストは英語の原書でしたか。

和田 そうでもなかつたです。ただ、二年生になるとアメリカ人宣教師から英会話を習う。これは同志社の特色の一つでした。

——じゃ英語が得意な学校だったわけ?

和田 週に二回かそこら習つても大したこ



和田洋一名誉教授

とはないですが……。それから、いまとちがうのは、全員無試験入学だったことで、京都府立一中、二中は入学試験がありました。

——人数制限なしに無試験で？

和田 人数は一クラス五十五、六人のがABCと三クラスで、無試験でもそれくらいしか来なかつたんでしような。たくさん来たらDクラスをつくれればいいんで。(笑)

和田 もう一つの特色は、生徒が全国から来ていたことです。京都府立一中、二中は京都の子供、だけでしたが。

——先生の頃もそうでしたか。私、先日、倉敷市の校友のお招きで話をしたんですが、たとえば明治二十五年の在学生で一番多いのが岡山県、ついで京都、兵庫、愛媛、熊本がベスト五。以下、大阪、群馬、福岡なんです。

現在は大阪ついで京都、それから近畿各県。
和田 寮がととのつていたから寮へ入って、寮生はずいぶん威張っていました。新島先生が全国を歩かれて、同志社へ生徒をよこすよう頼みましたから、その名残りだといえるでしょう。

——新島先生のお話ができましたのでお尋ねしたいんですが、先生の『新島襄』を拜見しますと、「まえがき」に、「親子二代同志社の教師をつとめながら、新島襄とは親近感のうすかつた私」とありますが、「同志社へ行く」と言われたお父さんは、おうちでは新島の話はされなかつたですか。

和田 あまりつぶさにはしませんでした。
——同志社中学は別ですね、チャペルの正面には新島の額がかかっているし、「新島襄」の名前が精神講話などでたびたび出たということも書いておられますが、授業でも新島について？

和田 中学三年の修身の時間は、四月から一年間新島先生の話をかかれました。岡山教会から来た安部清蔵という牧師が修身の担当でした。

——安部清蔵は同志社の宗教主任ですね。

和田 そうだったかな。とにかく、新島が生まれてから死ぬまでの話を一年間。
——どうでしたか。

和田 そんなに面白くもなかつたけれども、皆、わりにおとなしく聞いていましたね。それから新島先生の *My Younger Days* を英語の副読本に使いました。英語の勉強半分、新島の勉強半分で。

——その本は、大正五年に出ていますね。

三高・京大での学生生活

——先生は、同志社中学を卒業されますと、同志社大学の予科ではなくて、第三高等学校へ進学されますが、お父さんはなにも。

和田 中学のときは命令的に「同志社へ行く」と言いましたけれども、中学以上のことは何も言いませんでした。自分が帝国大学出身ということで、得をした面がある。それに官立のほうが授業料も安い(笑)。私は二度入試に失敗しましたが、どうしろとも言わなかった。

——入試はむずかしいんでしよう。

和田 同志社中学は受験準備式の教育をぜんぜんしないんだから、私も最初受けた年は、



父・和田琳熊

はじめから駄目だと思っていましたね。

——同志社中学からたくさん受けましたか。

和田 毎年二人か三人がやつと合格。京都府立一中から来た者がもつとも多くて、あとは神戸一中、神戸二中、大阪の北野中学、天王寺中学など、近畿のよく出来る者が集る中学校で勉強した者が入学して来た。入学してみると、四十名のクラスのうち、私立から来たのは私だけで、あとは全部府立・県立の出身者でした。

——じゃア、同志社とは学校の雰囲気がいぶんちがいますね。

和田 そりゃア、もう、ガラツとちがう。三高も自由の学園ということを盛んにいうていたけれども、同志社とはえらいちがう。県

立や府立から来た連中とは、どうもしっくりしないんですよ。自分だけが別の種類の人間みたいな、妙な所へ来たという感じてました。

——固いわけですか。

和田 さあ、どういえばいいのかわ。そこへもつてきて、なんだか偉そうにする数学の教師がいて、私はその教師に反抗心をおこしてよくけんかをしました。東京高等師範学校を出た人でした。ほかの者は反抗などしなから私一人孤立して、結局、勉強もしなかつたし数学で落第させられた(笑)。入試では落され入学の翌年は、数学で落され。(笑)

——同志社中学の教員タイプじゃない。

和田 あんなに偉そうにする教師は、同志社にはいなかつた。だから私は腹がたつて仕方なかつたんだと思います。県立や府立の奴はよう反抗せん、そういうふうには私に思つたです。

——旧制高校は将来の進路に関係なしに、第一外語を何にするかでクラス分けをするので、いろんな方面に進む人たちと出会えてよかつたといつた話を聞きましたが……。

和田 それはあまり……。私は将来ドイツ文学をやろうと思つている、それでドイツ語

のクラスです。そのクラスはとも平凡な秀才の集まりという感じてました。

とにかく、三高は「自由」「自由」いうんだけれども、三高の自由の鐘はガラガラ鐘で(笑)、同志社の彰栄館の自由の鐘はいい音がした。値打があつたなア(笑)、そんなことを思つたりしました。あとから考えてみると、同志社中学はそんなにわるい学校ではなかつたです。

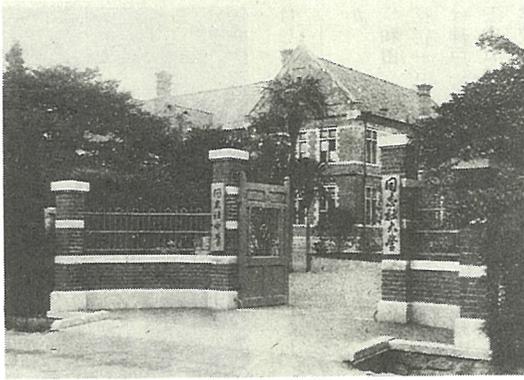
——京都帝国大学はどうだつたですか。

和田 京大へ入つて、またびつくりした。京大へは全国の旧制高等学校から学生がやつてくるわけで、俺は三高だ、俺は熊本の五高だ、俺は高知高校だと、出身高校の意識が強くて、ほかの高校から来た者と融和しない、クラス会もやらないんですよ。

——そういうことは、かつて聞いたことも読んだこともありませんが。

和田 私は文学部文学科のドイツ文学で、十五人の小さいクラスだった。そんなクラスでもお互いに仲好くしようとしなかつた。卒業してもう六十年たつけれども、一回も集まつたことがないですね。

——三高から来た者同士は別でしょう。



大正期の同志社大学・中学正門

和田 三高からも英語を第一外語にしていくクラスの出身とか、理科だとか、いろんなクラスから来ているから、特別に仲好くするということとはなかった。理科から来たなかに笠松という学生がいた。プロレタリア詩人で、拷問に耐える詩を書いた男です。そういう男ともちつとも仲好くならなかった。妙なものでしたなア。

——「日本浪漫派」に入った詩人の神保光太郎もたしか同級のはずですね。

和田 そうです。一緒でした。しかし親しくするということはなかった。

——その点では同志社がいいと……。

和田 そうですね。

——京大での指導教授はどなたですか。

和田 成瀬無極先生。

——リルケが読まはれはじめたところですか。

昭和十年ころ堀辰雄が『四季』で特集を組んだりしているから、もう少し後ですか。

和田 ハウプトマンがよく読まれていました、森鷗外が訳したということもあって。リルケはまだそれほどではなかった。

——卒業論文は？

和田 トーマス・マン。旧制高校の教科書に採用されるなどで、少し有名になりかけていた。私が卒業論文を書いている最中に、トーマス・マンがノーベル賞をもらいました。

——昭和十年前後の時代的雰囲気、トーマス・マンは合っていたのかもしれないね。

同志社大学予科の教授時代

——私など先生にいちばんお尋ねしたいの

は、先生が予科を教えられておられた頃のことですが、着任なさったのは？

和田 一九三〇（昭和五）年三月に京大を卒業して、その年の四月です。

——世界的な恐慌の時代ですねえ、「大学は出たけれど」……。

和田 そりゃアもう大恐慌。法学部、経済学部を出た人たちさえ職がないんだから、文学部の卒業生などにはあるはずがない。それでも、英文や国文はまだ教師の口がありましたけれども、ドイツ文学なんかやった者は、そりゃアもう……。でもまあ、なにか幸運がめぐってくるかもしれないと思って。

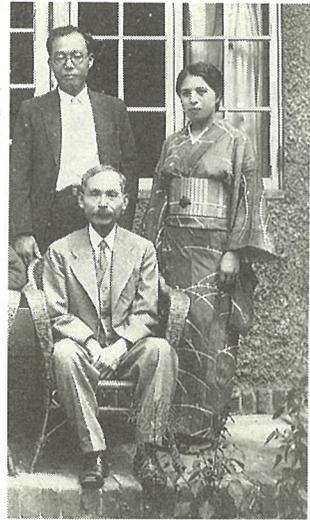
——じゃア、ラッキーでしたね。

和田 ラッキー、ほんとにそうでした。三月下旬、もう卒業式が残っているだけという

とき、同志社から帰ってきた父が、「予科長が、ドイツ語の先生が辞表を出されたので、お前を後任に採用するいうておる」とね。私はほとんど絶望していたんです。

——予科長は速水藤助先生ですね。五年度から日野真澄先生で。

和田 そうでした。それまでドイツ語を教えていた荻原耐（教授）という人が不祥事を



（時代の姉初子）さんの娘新子さん（二十五歳で逝去）と大工原総長は結婚なさっており、クリスチャンだった。それで理事の西村金三郎さんなどが、九州大学総長であった大工原先生に頼み込んで、同志社妻へ来ていただいたようですね。
 和田 たしかそういうことでした。

おこして、辞表を出したんです。私も知っていた人ですが、ドイツ語教師であることを嫌がっていた。同志社をやめて、松竹映画の助監督になりました。

——不況の時代には進学者が減少して、同志社中学の先生なども自転車で小学校へ勧誘にまわったそうですが、大学はどうでしたか。

和田 志願者はかなりありましたよ、三五〇名ぐらいのところへ五、六〇〇名ぐらい。だから入学試験をしました。

——大工原銀太郎総長の時代ですね。

和田 大工原さんは私が行くすこし前（一九二九年十一月）に就任されていました。

——湯浅八郎先生のお父さんである治郎氏の先妻（後妻、つまり八郎の母は、徳富蘇峰

——大工原先生を呼ぶについては、法学部内に異論があつてごたごたしていたとか。

和田 その頃のことは憶えています。学生から尊敬されていた中島重さんが同志社をやめたとか。その二年前に有終館の火事がありました。

——一九二八（昭和三）年十一月ですね。

和田 それで、御所には、天皇陛下がちょうど京都へ見え、ねておられるのに申し訳がないというので、予科の生徒が全員、丸坊主になったり、全理事が総辞職しました。

——理事のほとんど全員がその後再任されたのに、海老名総長はされなかった。

和田 西村をはじめ理事会が海老名総長をやめさせた、けしからんということで、中島

さんらが反対の先頭に立たれ、学生がストライキをやったりしてごたごたしたので。

——岩倉土地問題をめぐって、法学部内にはすでに批判の動きがあつたよう。

和田 そこへ総長辞任問題が重なつたので

——中島先生は、批判運動で学内をさわがせた責任をとられたとみていいですか。

和田 そういうことでしよう、辞表を提出したのであつて、くびになつたのではない。

——そのころから法学部内に意見の対立があつたようで、昭和十年代初期の「国体明徴論文事件」「上申書事件」までそれが尾をひいたのでないか。そういう気がしますが。

和田 それはもう、そのとおりです。

——予科や文学部はどうだったんですか。

和田 予科と文学部は仲好く連合教授会を開いたりで、法学部は騒ぎすぎるといふふうな空気がつたですね。それと、法学部にはマルクス主義者がおるといふ意見もあつた。

——いたんですか。

和田 いました。

——大工原総長が一九三四（昭和九）年三月に病死されたあと、しばらくして、京大教

授であった湯浅八郎先生が、一九三五（昭和十）年二月に総長になられますね。

和田 湯浅さんは大工原さんと姻戚関係にあったし、お父さんが同志社のために一生懸命尽した人だから、本人も同志社に対する責任を感じておられたでしょうし、肩書も帝国大学教授、理学博士だから、年は若くても総長になられておかしくはなかった。

——そうですね。

和田 それと、例の滝川事件のとき、農学部から京大評議員に出ていた湯浅さんは、文部省に反対の思想、意見をもっていて、滝川擁護派の立場をとられた。そんなことで、京大に対して不満をもっておられたんです。

それから、お家の近くに法学部教授の林要



速水藤助教

さんがいて、民芸などで個人的なおつきあいもあった。奥さん同士のつきあひもあったし。

それやこれやで、同志社が総長がなくて困っているのならやりましようということ。

——和田先生は一九三七（昭和十二）年の「チャペル籠城事件」については、なにもかもご存知でしょう。予科生がやったのですから。

和田 そのころ予科では、新村猛、真下信一、そして私と、若い元気な三人が反戦反軍で意見が一致していたし心強かった。三人とも京大出身でマルクス主義かそれに近い思想をもっていました。それと同志社の古いクリスチャンの先生で、速水藤助、南石福二郎さんが私たちと一緒にあって、籠城した右翼学生たちの首を切った。予科の先生のなかには反軍、配属将校反対の考えをもっている人が多かったから、学生処分が教授会でとおったわけです。

——右翼学生というのは、運動のリーダーですか。

和田 いやいや、リーダーだけじゃないですね。速水藤助先生がチャペルのうしろから繩梯子で登って、どういう連中が扇動しているか、窓から覗いていたんです。（笑）

——すごいですねえ、いいお年だったでしょうに。（笑）

和田 昔の先生は学生の顔と名前をちゃんと憶えていますから、速水先生の証言で教授会は自信をもって処分できたのです。

——その処分がけしからんというので問題がこじれますね。

和田 配属将校が、ふだんから思想的に好ましくないと思っている真下、新村、和田の三人の左翼が、速水、南石などクリスチャンの老教授と一緒にあって右翼学生を退学処分にした。ということは、右翼に煙たがられていた湯浅総長を守れということになる。

——配属将校は教授会の内部の様子まで知っていたんですか。

和田 それは教授会のメンバーだから……。中で幅をきかしていました。軍事教練をさぼって配属将校ににらまれると落第点をつけられる。教練一科目だけで進級できないんです。かわいそうだから、「なんとかならんですか」とほかの教員が言うんだけど、きかない。

——草川靖中佐ですね。

和田 荒木貞夫の皇道派のメンバーで、陸



湯浅八郎総長

軍の中ですら危険人物とみなされていたようです。キリスト教が大嫌い、その大嫌いな同志社へ配属になったものだから、余計にしまつがわるいわけです。湯浅総長は非国民だと、日本刀を持って総長室へ乗り込むとかね。喜んだのは右翼学生だけだった。二・二六事件のとき興奮して、「これで日本じゅうひっくり返るぞ」といって、有終館の二階で日本刀を抜いて剣舞をやって驚ろかしたり。

——最も反同志社的な人間ですねえ。

和田 それが教授会のメンバーで、懇親会などにも出てくるんですよ。それで、山田貞夫さん（当時教務主任、のち予科長）なんかが見の十六師団へ行きまして、「草川中佐はむちゃな人で困る、なんとかありませんか」と言ったら、「よくわかっています、軍でも困

っているんですよ」と言った。草川は同志社へ来る前に岐阜県でも問題を起こして、そのことは松本清張さんが書いています。

——そういう草川などの言動で、警察も動かざるをえなかったという側面があったかもしれませんね。配属将校に衝突くつもりで学生を処分したわけでしょう。

和田 警察も黙っておれんということになって、特高の警部がやってきて、教授会の最中に予科長（柴山健三）を呼び出して中立売署へ連れて行ったことがあります。そして、その年（十二年）十一月八日に新村と真下が逮捕された。「これはかたき討ちだ」と山田さんが言いましたね。

——学生処分の、ですね。

和田 そうです。私はそのときはまぬがれまして、予科長から「真下君がやられたようだ、学校へも来ないし電話もない。和田君、様子を見に行ってくれんか」と言うので、行きました。そしたら五、六人の特高刑事が家宅搜索をやっている最中でした。

そのとき刑事の一人が、なぜ和田を残したかということについて、事情を説明してくれました。これは私の『灰色のユーモア』に

も書かなかつたし、あまり人にもいわなかつたんですが、以前に下鴨署の特高係長が尋問したとき、和田を起訴するのは無理だと思つたらしい。

——思想的にですね。

和田 そうです。治安維持法というのは、私有財産の否定とか国体を認めないとか、そういうことがなければ抵触しない。だから、下鴨署の係長は京都府の特高課へ行つて、塩貝という左翼思想犯を扱う警部に、「和田はあかん、確証がとれん」というたわけです。

——でも、先生もやられますわね。

和田 塩貝特高警部は、「いや、和田を起訴してくれ」と頑張った。それで私はやられたわけですが（翌一九三八年六月二十四日）、取り調べの検事が「こんな頼りないマルクス主義者じゃあかん」（笑、勉強が足らんいうことですね。それでも塩貝が頑固で、とうとう裁判所へ送られて有罪ということになった。真下や新村と同じように懲役二年、執行猶予三年の判決でした。

——ひどいもんですねえ。もう一度『灰色のユーモア』を読ませていただこうと思いますが、湯浅総長が辞職（一九三七年十二月三

十一日)されたのは、予科の教授二名が逮捕され有罪判決を受けた(和田教授はその翌年)ことの責任をとる、ということもあつたのは事実ですが、同志社はもう湯浅総長ではにつちもさつちもいかなない状況にあつたのも事実でしょうね。

和田 それは確かにそうでした。

——湯浅総長が辞任されたあと、大塚節治先生が大学長に選ばれたのに就任されず、上谷統さんがしばらく事務取扱をされる。それで和田琳熊先生が選ばれるのですが(一九三八年二月)、文部省が大学長任命を認可しなかつたようですが……。

和田 父は連合教授会の投票で大学長候補者に決つたのです。ところが、同志社から認可の申請をしたところ、文部省がしぶつた。そこで父は、東大時代の友人である内ヶ崎作三郎が文部省の事務次官をやつていたものだから、会いに行つて、「どうなつているんだ」と尋ねたのです。そしたら、「君は問題ないんだが、息子の洋一君に治安維持法違反の容疑がかかつてる」と……。

——警察がからんでいたんですね。

和田 そうです。息子が逮捕されたりした

のでは大学長はつとめられまい」というわけですよ。

——類は一族に及ぶとまではいえませんが、大学の自治もくそもないですね。

和田 自治どころじゃない。当時はそりゃア、全くひどいものでした。

——草川中佐はどうなつたんですか。

和田 十六師団が引き取りました。「同志社にご迷惑をかけました」と。そのあと鈴木少佐というのが配属されて来ましたが、この人は軍人としてはおとなしい方でした。

——和田先生は十八カ月間身柄を拘束され、一九三九(昭和十四)年七月に同志社を依願退職されて、大阪時事新報とか独逸文化研究所などに勤務されることになるわけですが、お父さんが亡くなられますのは?

和田 一九四四(昭和十九)年七月二十七日、七十四歳でした。

——定年かなにかで退職なさつてのちも、亡くなられるまで講師として心理学などを教えておられますね。

和田 講師の収入で食べられるようにしてもらつたのです(笑)。同志社の退職金は僅かだし、年金制度もなかつたから。

——同志社としては伝記を書かねばならない方だと思えます。

新制大学の新聞学専攻

——敗戦の翌年、一九四六年四月に先生は予科教授に復帰されて、新制大学発足と同時に社会学科に新聞学専攻ができて、主任教授のかたちになりますでしょう。その間のいきさつをお教えいただきたいのですが。

和田 新聞学専攻の設置が決つたのは、一九四八年だつたと思います。アメリカの占領軍か教育視察団だつたかの勧告があつたわけです。アメリカのあちこちの大学には「スクール・オブ・ジャーナリズム」というのがあつて、学問的にジャーナリズムの講義をした研究したりしている。学生に原稿を書く訓練もさせている。そういう勉強をした者が新聞記者などになつて活躍しているわけです。ところが日本にはそうした教育をする学科、専攻がないものだから、新聞協会に働きかけるなどして、日本の大学にも新聞学科なり新聞学専攻をつくりなさいというたわけです。

——なるほど、新聞協会を動かして。

和田 そうそう。新聞協会があちこちの大

学に折衝した結果、早稲田、慶応、日大、上智、といった大学で、「つくりましょう」ということになった。関西では関西大学が熱心でした。

——そして、同志社？

和田 同志社は戦前から、NHKとか朝日新聞、毎日新聞などの人を招いて講義をしてもらうといった伝統があつたのです。同志社へも話をもちかけられたものだから、湯浅八郎総長（一九四七年四月再就任）が受け入れたわけです。

——湯浅先生はアメリカは詳しいから。

和田 アメリカの大学のことしか知らない方（笑）。それで、担当者を朝日、毎日、NHKなどから引き抜いてくることになって、名指しで交渉したんですね。就任の承諾はいちおう得られた。ところが同志社の給料を聞いてびっくりして、「そんな安い給料なら嫌だ」と（笑）。朝日、毎日の半額、あるいは三分の二になるんだから、無理もないわけですよ。

——断わられた？

和田 そうです。同志社当局は困ってしまった、私に話をもってきた、「和田なら同志社

の給料がいかに安いかわかっておる」（笑）。

——先生はドイツ文学が専門なのに。

和田 戦争中ジャーナリストで走りまわっておつたから、ずぶの素人というわけではなかったけれども……。社会学科のボスであつた竹中勝男さんなどが私のところへ来て、いろいろうまいことを言つたりしたものだから。

ドイツ文学を横へ置いて新聞学をやるといふことは、やはり考えました。考えた結果、日本が中国と戦争したり太平洋戦争をやつたりしてひどい結果をまねいたのは、朝日、毎日といった大新聞が戦争を支持するようなことをやつたからだ。ジャーナリズムについていままで研究らしい研究はされなかつたけれど、やる値打がある、というふうに思うようになったて、「やりましょう」と返事をしたので。考えた末、自分で決断したわけです。

——日本では新しい学問ですけれども、むずかしいものだと思うけれど、なにかございいますか。

和田 新聞学の教授は公正な立場に立つていなければならぬでしょう。そういう学問的な立場から、たとえば朝日の傾向をほめて読

売の傾向を批判したとすると、読売の商売に差し支えることになる。各新聞社には同志社の卒業生もたくさん行つて働いているわけで、新聞学の研究者は正直にものが言いにくい。まちの評論家の立場とはちがうわけで、私の経験からいうと、その問題にどうこたえるか、これがむずかしい。いまもつて、こうだという答えが見出せないのです。新聞学の教授は特定の新聞社の商売がたきになるしかないかどうか。新聞記者も批評の鋭さを持たなくなつてくる。そういった疑問が、現職を退いてからますます強くなつてきました。

——先生は定年退職されてからも、ますますご健筆でいらつしやいますが、こんごの仕事のご予定は？

和田 年をとるにつれて、これまでいかに考えないでできたか、ということがだんだんわかつてきましたね。同志社とか新島先生のことに ついてもそうです。これじやいかん、このままでは死ねないよ……。

——どうもありがとうございます。お元気で活躍下さいますように。

（一九八九年七月十八日、和田名誉教授宅で収録）